

「やってみよう！」を本人の中に位置づける ～経験学習理論をもとにキャリア発達を促す自己サイクルの根を～

○森 玲央名（就労移行支援事業所INCOP京都九条）
○日下部 隆則（就労移行支援事業所INCOP京都九条）

1 概要

就労移行支援事業所 INCOP 京都九条（以下「INCOP」という。）は、「やってみよう」を合言葉に、超実践型なカリキュラムで障害のある方の就労を支援してきた。特に『ミニ実習』と名付けた地域企業での雇用を前提としない“体験としての企業・地域実習”を支援の柱としている。2023年の開所から2年以上経過し、協力いただいている企業・地域団体も増え、超実践型という標榜に恥じない体験・経験を利用者へ提供している。

この“実経験を基にした就労支援”をさらに効果的なものにするため、David A.Kolbの経験学習理論をベースに『ミニ実習』での支援を見直してみた。これまでも、個別の対話を基本とした振り返りを実施していたが、そこに経験学習理論を取り入れることでさらなる利用者の自己理解を促し、また、内省の習慣を身につけることでより一層のキャリア発達を見込めるのではないかと考えた。

2 経験学習サイクル－内省の充実－

(1) ミニ実習と経験学習サイクル

経験学習理論において経験学習サイクルがある¹⁾（図1）。このサイクルをもとに整理すると、『ミニ実習』が『経験』にあたり、その『経験』を実習の振り返りという『内省』によって、『教訓』に昇華し『実践』へつなげ、新たな『ミニ実習』＝『経験』というスパイラルを回していくこととなる。『経験』『実践』について、“INCOP”は民間企業だけでなく地域団体、スポーツ団体等での多様な『経験』『実践』を提供している。また、あわせて、このサイクルの中で“社会の中での自分との関係”“自分の理解”“いま、そしてこれからの計画”に『気づく』キャリア発達の支援を踏まえて、今回は『内省』の充実から『教訓』への昇華に着目する。

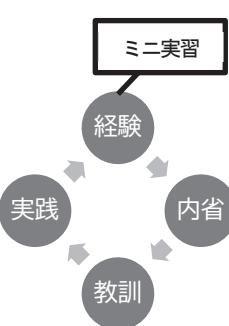


図1 経験学習サイクル

(2) 経験学習サイクルへの支援

ア KPT法を応用した『内省支援紙』

『内省』に取り組みやすくするための支援としてKPT法を取り入れた『内省支援紙』を作成した（図2）。知的障害の方も書きやすいようK（Keep）P（Problem）T（Try）

の前段階としてr（気づきrealize）とf（気持ちfeeling）を追加し、書き出したrf-KPTをもとに対話をおこない『経験』を深く『内省』し、『教訓』や次のハードル・目標を導くことを目的としている。

イ 『経験』を本人の夢・希望とつなぐ『将来航路図』

一つ一つの経験学習サイクルを本人の「就職したい」などの夢や希望に関連付けていくために、本人中心アプローチの一つであるPATH（-Planning Alternative Tomorrow with Hopes, 「よりよい未来のための計画」）を簡略化した『将来航路図』を作成した（図3）（PATHでは本人の願い＝幸せの一一番星を中心に障害のある人本人と、関係のある多くの人が一堂に会して、障害のある人の夢や希望に基づき、一番星達成のための作戦を立てる²⁾）。この『将来航路図』は本人と対話しながら夢・希望と今の実態をつなぐ支援紙として活用している。特に実態については『内省支援紙』との共通項目KPがあり、また、就労意向については別紙で定期的に記入している用紙、個別支援計画と項目をそろえている。

図2 内省支援紙

図3 将来航路図

3 活用事例

(1) 実習の自己理解を発信

利用者Aは知的障害があり支援学校卒業後すぐに“INCOP”を利用している。周りをよく見て動け、気が利く反面、人と話すことが苦手であり、質問や報告等もしり込みしてしまう様子が見られた。利用して2ヶ月経過した頃に個別の実習を設定し、座位での製品の組み立ての作業に取り組んだ。あいさつ、返事などの実習態度等はよい評価だったが、肝心の作業面では厳しい評価だった。そこで、実習での経験を『内省支援紙』で整理し、自己理解を促した（図4）。

その後、就労移行支援事業所説明会に当事者として説明する実践の機会を設定した。そこで来場者からの「“INCOP”でどのようなことを学んだのか？」という問い合わせに、「自己理解ができた。自分の得意なことと苦手なことが整理できている。前回の実習では細かい作業は苦手だと分かった。これからそれ以外の作業がどうなのか試していきたい」と答えることができた。10人前後の人人が聞いている前で堂々と、そして自分のことを語っている姿に経験学習サイクルからの学び・成長を感じた。今後、多様な経験を重ねることでさらに自己理解が深まることを確信できたエピソードである。

図4 Aが記入した内容を転記した内省支援紙
丸字：本人、ゴシック：支援者

(2) いま自分のやるべきことがわかり行動の変容に

利用者Bは、知的障害があり、がんこな面があり、ルールの順守、あいさつ等、その場で注意するだけではなかなか改善が見られないことがあった。そこで、『将来設計図』を先に用い、自分が目指す姿、そしてどのような力が必要か明確にした。

その後、『省内支援紙』を用いて、いまの実習の状況を振り返り、『将来設計図』を作成した（図5左側）。全体的にポジティブなことは書けるが、Problemが具体的には記述が難しかった。その中でも気持ちに「反省している」と書くことはできた。また「ルールを守る」「最後までやりきる」「すぐに謝る」等のすべきことを共有した。

すると、特に実習場面ではそのことを最後までやりきつたり、すぐに謝れたりする場面が見られた。そこで、一定期間のうちに同様に『内省支援紙』『将来設計図』を作成した(図5右側)。『内省支援紙』への記述がより具体的になり、そのことが『将来設計図』のすべきことがより具体的になることにつながった。また、この『将来設計図』で書いたことを意識していることも伺え、そのことへのポジティブな評価も共有でき、次に向かう意欲もはぐくむことができている。

今後も定期的に活用しながら経験学習サイクルを実施することで、良い姿、にもっと焦点を当て、さらに本人の望む就労へとつなげていきたい。

図5 Bが記入した内容を転記した用紙
丸字：本人、ゴシック：支援者 左が1回目、右が2回目

4 今後の展望

経験学習モデル、経験学習サイクルを意識することで、“INCOP”的“やってみよう”的効果がさらに広がる手ごたえを感じている。そのためには『経験』『実践』とともに、そこでどのような自己理解を得ているのか、またそこからどのような『将来設計』をしているのかを言語化を通して把握していくことが大変重要になる。

利用者の願いや実態を把握しながら、個々の特性や性格などに応じて、効果的なタイミングで『内省』と『将来設計』に取り組み、『いま、なんのために、“INCOP”に来ているのか』をしっかりと共有しながら、主体的に就労に向かって行動できるような支援を今後も心掛けていきたい。

【参考文献】

- 1) 松尾 瞳『職場が生きる人が育つ「経験学習」入門』、ダイヤモンド社（2011）
 - 2) 涌井 恵『国立特別支援教育総合研究所 教育相談年報 第30号 本人中心アプローチによる障害のある子どもの支援の輪作りに関する事例報告』（2009）

【連絡先】

森 玲央名

就労移行支援事業所INCOP京都九条

e-mail : incop.mori@gmail.com